

母が家庭学習に関わる子ども

校外の勉強時間長く

厚労省調査

母親が家庭で子どもの学習に関わっているほど、子どもの学校外での勉強時間は長い傾向がみられることが、厚生労働省の調査で明らかになった。

調査は昨年5月、2010年生まれの小学2年生約2万4000人の家庭を対象に実施した。

※厚生労働省調べ

母親の家庭学習への関わりと
学校時間外の勉強時間

	母親が勉強するように言っている		
	よくある	ときどきある	ほとんどない まったくない
30分未満	21.2%	27.9%	31.9%
30分～ 1時間未満	46.8%	46.5%	42.3%
1時間～ 2時間未満	28.4%	22.8%	18.5%
2時間以上 勉強をしない	2.9%	1.8%	1.7%
	0.5%	0.9%	5.4%

調査で、母親が「家で勉強をするように言っている」「かどうかを尋ねたところ」「よくある」は61.2%、「ときどきある」は28.7%、「ほとんどない」「まったくない」は9.6%だった。

子どもの学校外での1日あたりの勉強時間（宿題や学習塾などを含む）との関係を見ると、勉強時間が「1時間～2時間未満」の子どもは、母親が勉強するように言うことが「よくある」

家庭の中では28.4%だった。「ほとんどない・まったくない」家庭の中では18.5%で、約1割の開きがあった。

また、「勉強をしない」とした子どもは、母親が勉強するように言うことが「よくある」家庭のうち0.5%だったのに対し、「ほとんどない・まったくない」家庭の中では5.4%だった。

また、母親が「勉強をみているかどうかを聞いた質問では、勉強時間が「1時間～2時間未満」の子どもは、母親が勉強をみることが「よくある」家庭の中では29.5%だったが、「ほとんどない・まったくない」家庭の中では18.9%にとどまった。

厚労省世帯統計室では、「小学校低学年のうちは、親の言うことを素直に聞くので、親が関わることで、子どもが勉強に向かうようになるのではないかとみている。

このほか、調査では、子どもに携帯電話（スマートフォン含

むを持たせているかも知聞いた。持たせている割合は17.9%で、持たせ始めた時期は「小1から」が68.8%に上った。持たせた理由（複数回答）は、「子どもと連絡ができるように」が

スマホ持ち込み

「禁止」「見直し」協議

文科省有識者会議

小中学校への児童生徒のスマートフォンや携帯電話の持ち込みについて、文部科学省の有識者会議（座長＝森田洋司・鳴門教育大特任教授）は、「原則禁止」としてきた方針の見直しに向けて協議を始めた。

今後、スマホなどの利用による健康面への影響や、学校での管理方法などについて議論し、2019年度中にも新たな方針を示したい考えだ。

5月31日に開かれた初会合では、委員から「高価な機器のため、紛失時のトラブルが心配」

86.3%で最も多く、「子どもの居場所を確認するため」（62.7%）、「きょうだいが持っているから」（10.3%）、「子どもがほしいと言ったから」（4.5%）などが続いた。

「（児童生徒がスマホなどを）持ちたいという気持ちを誘発してしまうのではないか」といった意見も出た。

文科省は09年に出した通知で、携帯電話が教育活動に直接必要のない物として、小中学生の持ち込みを原則禁止し、高校生は校内での使用を制限すべきだとしている。

一方、内閣府の調査によると、18年度のスマホ利用率は小学生で45.9%、中学生で70.6%、高校生は97.5%に上っている。大阪府教育庁は3月、災害時や緊急時の連絡手段として、公立小中学校でスマホなどの持ち込みを今年度から認めるガイドライン（指針）を発表している。

校長室から

（R元年度）

ひがしなら通心

茨木市立東奈良小学校 川上 隆 No. 14

令和元年6月7日（金）発行

学力向上に向けて

～学校と家庭で行う役割～

子どもの「学力向上」は、保護者の方や教員の誰もが願うことだと思います。

学校は子どもたちの学力向上に向け、全教職員が一丸となって取り組んでいます。子どもの体験活動を重視しながら学習意欲を伸ばし、勉強に対する自信ややる気を育てる方法を今年度も研究しているところです。このように学力向上には、学校の果たす役割が大きいことも事実ですが、それ以外にも多くの配慮すべき事柄があるようです。

以前、文科省の全国学力・学習状況調査で常にトップクラスの成績を維持している秋田県と福井県の分析結果を読んだことがあります。なぜ、常にトップクラスなのか？その要因とは、次の6点だそうです。

- 1) 教員の授業力向上に対する取組み
- 2) 外部の組織・団体の積極的な働きかけと研究活動
- 3) 教員全体の共通理解に基づく熱心な学習指導
- 4) 児童・生徒の素直さと真面目さ
- 5) 家庭の安定と家庭の教育力
- 6) 勤勉で連帯感のある地域や風土



これらの要因を見ると、学校に関するものと子どもや家庭・地域に関するものが半数であることがわかります。教員が授業研究に取組み、子どもにとって楽しい授業ができる力を身につけることはもちろん大切なのですが、ある大学の研究者の論文では、第一にあげられたのが「家庭学習の指導の充実」、第二に「実践的な教員研修」が学力向上の要因でした。

また、①朝食時の生活習慣、②勉強や成績に関する温かな会話、③児童・生徒の学習習慣と学校規則への対応など、ご家庭でもご協力いただけることが学力向上の大きな要因となっていることも別の研究者から報告されています。

昔から言い尽くされていることですが、やはり、学校と家庭・地域社会がそれぞれの立場で誠実にやり遂げることが学力向上の基本ではないでしょうか。

右側は、6/5（水）読売新聞朝刊の記事です。